

小学校体育授業の個人種目における運動有能感を高める授業の在り方の検討

－小学校高学年の走り高跳び単元を例に－

須貝 匠 (群馬大学)

1. 目的

本研究では、小学校6年生を対象に運動有能感を高める指導方略を適用した走り高跳びの単元を取り上げることで、運動有能感が向上するかどうかを明らかにすることを目的とした。また、運動有能感の3因子のうち「身体的有能さの認知」と「統制感」は、技能を高めることと関連があると考えられることから、試技中の動作得点、記録の伸びと運動有能感の関係についても検討することにした。

2. 方法

- 1) 実施期間：2023年10月2日～11月14日
- 2) 対象者：G県M小学校6年生(計25名)
- 3) 単元計画：7時間の走り高跳びの単元計画を作成し、1授業の流れは、主運動につながる補助運動→本時の学習内容の確認→課題練習→記録の測定とした。

1	2	3	4	5	6	7
オリエンテーション	①準備運動、補助運動					
	②学習内容の確認					
	【助走】	【踏切】	【空中動作】	【課題解決】	【記録会】	
	③課題練習(チーム内)					
	④記録測定					
⑤学習のまとめ						

図1 単元計画

4) 運動有能感を高めるための指導方略：鬼澤ら(2022)を参考に走り高跳び単元に当てはまるように一部変更した(表1)。

表1 運動有能感を高めるための指導方略

3つの視点	走り高跳び
①教材の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・記録の伸び、技能向上に焦点を当てた目標設定 ・走り高跳びの動きに繋がる準備運動、補助運動 ・少人数グループの採用(1チーム4-5) ・全員の学習の機会を保障(ローテーションの採用) ・技能の緩和 ・チームで協力することで獲得できる得点制度の採用(記録伸び合計)
②豊かな仲間との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム力が均等になるグループの採用 ・動きを確認する場におけるペアの設定 ・チーム内で行う課題別練習 ・学習進行に関わる役割の設定 ・チームで動きを確認する話し合いの場の設定 ・良い動きや仲間同士の教え合いに対して価値化
③教師による働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的な相互作用(肯定的、矯正の・具体的なフィードバック) ・学習内容を明確にし、それを児童に分かりやすく提示 ・めあてに対する振り返りの実施

※下線は本研究において修正した内容を示す

5) 運動有能感調査：岡澤ら(1996)が作成した運動有能感尺度(「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」)を単元前後に実施した。

- 6) 動作分析：藤田ら(2010)の観察的評価基準(4つの局面：「助走」「踏切準備」「踏切」「空中」)に基づき、はさみ跳びの試技について得点化を行った。
- 7) 記録の変化量(伸び)の算出方法：「単元7時間目の最高記録－単元前1時間目の最高記録」とした。

3. 結果と考察

- 1) 運動有能感の変容をみると、「運動有能感合計」(単元前：45.2点、単元後：47.9点)、「身体的有能さの認知」(単元前：12.0点、単元後：13.3点)において単元前に比べて単元後に有意な向上がみられた($p<.05$)。
- 2) 動作得点の変容をみると、「動作得点合計」と局面ごとの得点においていずれも単元後に有意な向上がみられた。
- 3) 記録の変容をみると、単元後に有意に向上した。
- 4) 運動有能感の変化量(単元後の得点－単元前の得点)と記録の変化量との関係をみると、有意な相関関係はみられなかった。
- 5) 運動有能感の変化量と動作得点の変化量(単元後の得点－単元前の得点)との関係をみると、「空中」局面と「運動有能感合計」、「統制感」の間に有意な相関関係がみられた。また、「踏切準備」局面と「受容感」の間に負の相関関係がみられた(表2)。

表2 運動有能感の変化量と動作得点の変容の関係

	助走		踏切準備		踏切		空中		合計	
	r	p	r	p	r	p	r	p	r	p
合計	-0.008	.973	-0.002	.993	0.122	.598	0.587	.005**	0.354	.116
有能さ	-0.242	.290	0.189	.411	0.043	.853	0.421	.057	0.213	.353
統制感	-0.107	.643	0.413	.063	-0.195	.398	0.465	.034*	0.330	.144
受容感	0.282	.215	-0.461	.036*	0.303	.181	0.298	.190	0.182	.429

(* $p<.05$ ** $p<.01$)

4. 結論

以上の結果により、運動有能感を高める指導方略を適用することによって運動有能感が向上することが示唆された。また、運動有能感と技能の関係性をみると、記録の伸びとは関係がみられず、「空中」局面での動作得点が向上すると、運動有能感が向上することが示唆された。

<参考文献>

鬼澤陽子ほか(2022)小学校低学年の体育授業における運動有能感を高める指導方略の有効性の検討.スポーツ教育学研究,42(2):19-37.